

## 「国語教科書」はどのように自称するか

—自称詞に着目した学習に関する一考察—

渡辺 亨子

### 1. 研究の目的

小稿の目的は、国語科教科書での自称詞の扱われ方について調査を行うことを通して、国語科教科書における自称詞の特徴を見出すと共に、自称詞に特化した学習指導や、自称詞に着目した文学的文章の学習のあり方を考察することである。

人が自分自身について言及する際、英語では原則として自分のことを「I」と言うのに対し、日本語では様々な自称詞を用いる。それらは話者が性別や年齢、相手、場面等によって無意識に、または意識的に使い分けられていると考えられる。日本人が特定の自称詞を用いるのには何かしら理由があるはずである。数多くの自称詞をどのように獲得しているのか、また、なぜ数多くの自称詞を使い分けるのか、使い分けることでどんな効果があるのか。加えて、「話す・聞く・書く・読む」といった、生活の基本となる言語活動を学び、数多くの言葉に出会う場である「国語」という教科において、どのような自称詞がみられ、どのように扱われているのか調査することで、筆者が持つ上記の問いが明らかになることが期待される。

### 2. 研究の方法

小稿では、研究の目的を踏まえ、日本語における自称詞について、先行研究を基に、時代・発達・性差に着目して、その特徴を概観する。また、自称詞の持つ役割や機能、使い分けの効果についても明らかにする。加えて、光村図書出版の小学校・中学校国語科教科書の悉皆調査並びに分析を行い、国語科教科書における自称詞の出現傾向について特徴を明らかにし、自称詞に特化した学習指導の提案や、自称詞に着目した文学的文章の学習

の可能性について検討する。

以上の方法により、小稿では「国語」という教科においてこれまであまり重視されてこなかった自称詞の役割を学ぶことの意義、自称詞に着目した読解指導の可能性を示す。ただし、翻訳文学作品の原文との比較や子どもたちの自称詞使用実態調査については言及していない。

### 3. 国語科教科書悉皆調査における結果と考察

#### 3. 1 調査の概要

本調査の目的は、児童生徒の自称詞習得や選択、使用に関して、国語科教科書が与える影響を考察することである。

調査に使用した教科書は光村図書出版の小学校・中学校国語科教科書である。学校の授業で使用される教科書は、子どもたちが成長していく中で必ず触れるものである。また、筆者の経験上、物語や昔話が多く掲載されている国語科の教科書は、他教科と比較して出現する自称詞の種類が多いと推察する。そのような国語科教科書においては、どのような自称詞が見られるのか、またその出現傾向や特徴を、本調査を通して明らかにする。

#### 3. 2 調査の方法

本研究の調査対象は、平成 26 年度版小学校国語科教科書（光村図書）、及び平成 27 年度版中学校国語科教科書（光村図書）延べ 13 冊の全文である。これら全文を悉皆調査し、該当する語句について、以下の項目で分類・データベース化した。

- ① 学年・上下／② 单元名・教材名／③ ページ／④ 文種（説明的文章・文学的文章・言語活動）／⑤ 場面・形式（話す〈会話〉・話す〈発表〉・書く・本文〈地〉・本文〈会話〉・单元名・その他）／⑥ 該当語句の含まれる文／⑦ 該当語句／⑧ 該当語句に付属する助詞／⑨ 該当語句の含まれる文の文末／⑩ 文末表現（敬体・常体・口語体・その他）／⑪ 話者の性別（男・女・不明）／⑫ 話者の年代（幼児・児童・生徒・若者・大人・老人・不明）／⑬ 話者の名前／⑭ 聞き手の性別（男・女・男女・不明）／⑮ 聞き手の年代（幼児・児童・生徒・若者・大人・老人・不明）／⑯ 聞き手の名前／⑰ 関係性

### 3. 3 調査の結果

#### (1) 学年別自称詞出現数

抽出された該当語句の延べ数は1,799語(異なり語数63語)である。全体的には学年が上がるにつれ出現する自称詞数も増加している(【表1・図1】参照)。その要因の一つとして考えられるのは、学年が上がることによる文章量の増加である。

小学校で自称詞出現数が最も多いのは「小6」の228例で、小学校全体の30%近くを占める(【表2】参照)。2番目に多いのは、「小3」の155例である。その割合は同じく小学校全体の20%近くにのぼる。

中学校では、「中1」の自称詞出現数が363例と最多であり、「中2」が310例と最少になっている(【表3】参照)。割合をみると分かるように、学年で大きく差はないと考えられる。

【表1：学年別自称詞出現数】

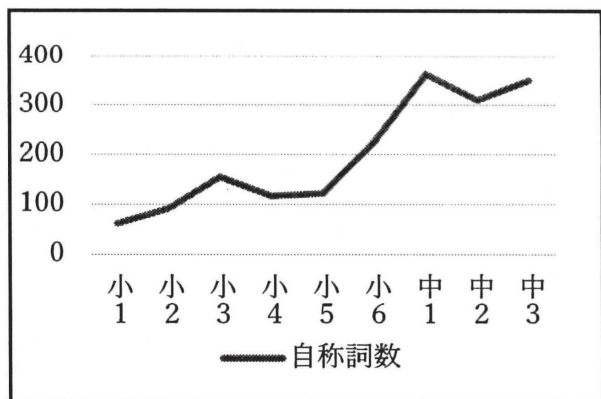
学年	自称詞数	比率
小1	62	3.45%
小2	92	5.11%
小3	155	8.62%
小4	117	6.50%
小5	122	6.78%
小6	228	12.67%
中1	363	20.18%
中2	310	17.23%
中3	350	19.46%
<b>総計</b>	<b>1799</b>	<b>100.00%</b>

【表2：小学校学年別自称詞出現数】

学年	自称詞数	比率
小1	62	7.99%
小2	92	11.86%
小3	155	19.97%
小4	117	15.08%
小5	122	15.72%
小6	228	29.38%
<b>総計</b>	<b>776</b>	<b>100.00%</b>

【表3：中学校学年別自称詞出現数】

学年	自称詞数	比率
中1	363	35.48%
中2	310	30.30%
中3	350	34.21%
<b>総計</b>	<b>1023</b>	<b>100.00%</b>



【図1 学年別自称詞出現数】

## (2) 文種別自称詞出現数

小学校の自称詞出現数を文種別にみても、「文学的文章」の自称詞出現数が最も多く 412 例であり、全体の半数以上を占める。また、「説明的文章」の自称詞出現数が 89 例と著しく少なく、全体の 1 割にとどまる結果となっている（【表 4】参照）。

「説明的文章」では、全 89 例の内、「小 6」で出現する自称詞数が 45 例と、当該文種の半数以上を占める。

「言語活動」では、学年が上がるにつれ出現度数が増えているが、「説明的文章」と「文学的文章」ではそのような規則性がみられない。

【表 4 小学校文種別自称詞出現数】

	言語活動	説明的文章	文学的文章	総計
小 1	25 (40.32%)	0 (0.00%)	37 (59.68%)	62 (100.0%)
小 2	41 (44.57%)	7 (7.61%)	44 (47.83%)	92 (100.0%)
小 3	45 (29.03%)	2 (1.29%)	108 (69.68%)	155 (100.0%)
小 4	46 (39.32%)	24 (20.51%)	47 (40.17%)	117 (100.0%)
小 5	53 (43.44%)	11 (9.02%)	58 (47.54%)	122 (100.0%)
小 6	65 (28.51%)	45 (19.74%)	118 (51.75%)	228 (100.0%)
総計	275 (35.4%)	89 (11.5%)	412 (53.1%)	776 (100.0%)

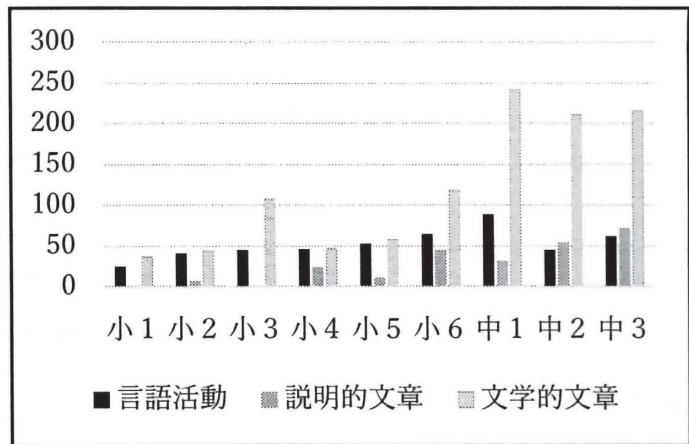
中学校では、「文学的文章」の自称詞出現数が最も多く、全体の 6 割以上を占めており、2 番目に多いのは「言語活動」となっているが「説明体文章」と大差はない（【表 5】参照）。

【表 5 中学校文種別自称詞出現数】

	言語活動	説明的文章	文学的文章	総計
中 1	89 (24.52%)	32 (8.82%)	242 (66.67%)	363 (100.0%)
中 2	45 (14.52%)	54 (17.42%)	211 (68.06%)	310 (100.0%)
中 3	62 (17.71%)	72 (20.57%)	216 (61.71)	350 (100,0%)
総計	196 (19.16%)	158 (15.44%)	669 (65.40%)	1023 (100.0%)

「説明的文章」では学年が上がるにつれ、自称詞出現数も増加しているが、「文学的文章」と「言語活動」では目立った傾向がみられない。

また、小学校と中学校を比較すると、中学校では「文学的文章」での自称詞出現数が著しく増加していることが分かり、



【図2 文種別自称詞出現数】

「説明的文章」は全体的にみると学年が上がるにつれ自称詞数も増加していることが分かる（【図2】参照）。

### （3）複数の自称詞を用いる登場人物

基本的に、一人の登場人物が用いる自称詞は1種類だが、中には複数の自称詞を使い分ける登場人物が出てくる作品もある。

小2上「いなばの白うさぎ」「わたしはおねえさん」「スーホの白い馬」

「三まいのおふだ」

小3下「とらとおじいさん」

小4下「ごんぎつね」「初雪のふる日」

小5「わらぐつの中の神様」

小6「やまなし」

中1「少年の日の思い出」

中2「アイスプラネット」「言葉の力」「世界で一番の贈り物」

「走れメロス」

中3「握手」「故郷」

以上の16作品には役割語の使用やスタイル・シフトがみられる。一人称視点の作品の場合は、語りに用いられる自称詞とその語り手の話し言葉である台詞として用いられる自称詞に違いがみられた。

## 3.4 小学校教科書

### （1）スタイル・シフト

同一人物が異なる自称詞を用いることによって、文脈に応じた自分の立場や相手との関係性を示す作用をスタイル・シフトという。これが初めて

みられるのは、「小2上」の「いなばの白うさぎ」である。

104：わたしは、おきのしまにすんでいました。

105：「われわれうさぎと、きみたちわにさんと、どっちが多いか少ないか、くらべてみないか。」

104 は白うさぎが神様の兄弟であるオオクニヌシに向かって話す場面で、105 は白うさぎがわに（本文の脚注ではさめと記されている）に向かって話す場面である。「わたし」と「われわれ（うさぎ）」を比べると、「わたし」のほうが「われわれ」より丁寧で改まったイメージがある。『広辞苑第七版』では「われわれ」について以下のように述べられている。

①わたくしたち。われら。

②自分の謙称。わたくしのようなもの。

うさぎはわにと個体数を比べる提案をしており、ここでは①が選択される。その際、わにと対等の関係であることを示していると解釈され、104 における関係よりも自らを上位に置こうとしていることが示唆される。

『こくご二下 赤とんぼ』の「わたしはおねえさん」という單元においては、主人公の「すみれちゃん」が、自身が作った歌の中では自分のことを「わたし」と言っている。ところが妹の「かりん」に対しては「ねえね」という自称詞を用いている。同書の「スーホの白い馬」では、「スーホ」が「白馬」に対しては「ぼく」というのに対し、「とのさま」に対しては「わたし」という自称詞を用いている。「とのさま」という、ひつじかいからしたら目上の立場の人に対して、「わたし」という自称詞を用いることで改まった印象を与えると考えられる。

なお、『国語五 銀河』の「わらぐつの中の神様」においては、「おみつ」が「わたし」と「おら」という2つの自称詞使用がみられる。「わたし」を用いるときは「おみつ」が心の中で発話する場面で、「おら」を用いるときは実際に声に出して、誰か（本文では後に夫となるわかい大工）と会話する場面である。これらのことから、日常会話で使用する自称詞と、心の中で思考するとき使用する自称詞が変化する場合があることが分かる。

## （2）役割語

国語教科書で自称詞の役割語が初めて出てくるのが「小2上」の「じゅんばんんにならぼう」で、教師が児童に向かって「先生のまえに、『たんじょ

う日』が早い人からじゅんばんにならびましょう。」と言う場面である。教師が自分のことを「先生」と言い、児童たちに自分の立場を示すとともに、子どもたちは小学生であり、その小学校の児童であるのだと意識づける効果があると思われる。また、「小2下」の「わたしはおねえさん」では、主人公のすみれが妹のかりんに対し、「じゃあ、かりん。こんどはねえねがおべんきょうするから、ちょっとどいてね。」と語りかける場面がある。これも、自分（すみれ）はかりんのお姉さんという立場であることを明確にする機能があると考えられる。また、すみれは「おねえさん」という立場に強い憧れを持っている。そんなすみれが自分のことを「ねえね」と自称することを通して、憧れの存在に少しでも近づくことができたのではないだろうか。『こくご二下 赤とんぼ』の「スーホの白い馬」では、「とのさま」が「わし」という自称詞を用いているのに加え、「うちのめせ。」という強い命令口調を用いていることで、横暴な人格を思わせる。同書の「三まいのおふだ」は昔話ということもあり、「おら」や「～けろ」などの方言の代表的な言葉づかいが目立つ。また、男である「おしょう」と女である「山んば」の自称詞（おら）が同一であった。『国語三上 わかば』の「もうすぐ雨に」では、「からす」が「わたくし」という自称詞を用いている。そうすることで、筆者の主観ではあるが、少し気取った、高貴で上品なイメージが与えられる。加えて、物語の中で「からす」の性別は明らかにされていないが、「～ですの。」という語尾を用いることによって“女性らしさ”を感じさせるのではないだろうか。他にも、同書の「たのきゅう」や「ちいちゃんのかげおくり」、「三年とうげ」、『国語三下 あおぞら』では「モチモチの木」、『国語四上 かがやき』では「ふるやのもり」、『国語四下 はばたき』では「ごんぎつね」、『国語五 銀河』では「わらぐつの中の神様」、「見るなのざしき」、『国語六 創造』では「河鹿の屏風」等に役割語と思われるものが見られた。

『国語五 銀河』に掲載されている「わらぐつの中の神様」の中では、無生物である「雪げた」が発話する場面がある。これは、「おみつ」の想像によるものだが、「ねえ、わたしを買ってください。あんたが買ってくれたら、うれしいな。」というように、「わたし」という自称詞を用いて女性の友人であると感じさせる言葉づかいをしている。これは、「白い、軽そうな台に、ぱっと明るいオレンジ色のはなお。上品な、くすんだ赤い色のつま

皮は、黒いふっさりとした毛糸のふちどり」でかざられている「かわいらしい雪げた」が発話している体だからであろう。

以上のように、自称詞や文末表現に見られる役割語は主に文学的文章に多くみられ、特に昔話では必ずと言っていいほど出てくることが分かる。

### 3. 5 中学校教科書

#### (1) スタイル・シフト

中学校の国語教科書で初めて自称詞によるスタイル・シフトがみられるのは、『国語1』の「私が選んだこの一冊」という単元である。

62：僕は、川端裕人さんの「リョウ&ナオ」を紹介します。

63：この本は、私たちと同じ中学生が出てくる物語です。

このように、普段は「僕」という自称詞を用いる話者が、自分を含めた複数人をあらわすときは「私たち」という自称詞を用いている。男だけではなく女も含めた「私たちと同じ中学生」を表現するために、公的なイメージを持つ「私」が用いられていると考えられる。

同書の「少年の日の思い出」や『国語2』の「アイスプラネット」では、語りと外言で用いられる自称詞に差異がみられる。

「アイスプラネット」

365：僕のおじさんは「ぐうちゃん」という。

381：「～。俺、風呂の時間だし。」

381の場面は、居候の「ぐうちゃん」に「僕」がからかわれる場面である。学習者と同じ年代であると考えられる「僕」が、「ぐうちゃん」に対して、強がるような、大人ぶるような印象を受ける。一方、『国語3』の「故郷」では、語りでは「私」、「ヤンおばさん」に対しては「僕」という自称詞を用いることで、自分は決して高貴な身柄ではなく、昔と何ら変わらないという謙遜の気持ちを表している印象を受ける。

ほかにも、『国語2』の「走れメロス」や『国語3』の「握手」では、外言における固有名詞を用いたスタイル・シフトがみられた。

「握手」

686：「それよりも、わたしはあなたをぶったりはしませんでしたか。」

690：「ルロイのこの言葉を忘れないでください。」



690 の場面で、「ルロイ」を「わたし」にしてしまうと、「この言葉」の重みや聞き手である「わたし」の意識が少し薄れてしまうと考える。固有名詞を自称詞にし、それまでの会話と変化を持たせることによって、「ルロイ」が言った「この言葉」という印象を強く持たせる効果があると考えられる。

## (2) 役割語

中学校の国語科教科書で役割語が最初に出てくる単元は、『国語1』の「花曇りの向こう」である。話者である「ばあちゃん」が、自分のことを「ばあちゃん」と称し、語尾は「～や。」を用いている。小学校でみられた役割語と同様に、自分が聞き手の「おばあさん」であることを示しているのである。これと同様の働きをしていると思われるのが同書の「大人になれなかった弟たちに……」や『国語3』の「蝉の声」でみられる。

一方、小学校の国語科教科書において、昔話で多用されていた「おら」が、昔話以外でも出現する。例えば、『国語2』に掲載されている「盆土産」や『国語3』に掲載されている「故郷」である。

「盆土産」

468:「おらと婆っちは一匹ずつでええ。」

「故郷」

806:「おいらとこ、砂地に雪が降るだろ。」

これらに共通するのはどちらも話者が「田舎」の者であり、高貴な人柄ではないということだ。小学校の国語科教科書では昔話に用いられていた「おら」や「おいら」が現代の文章に用いられることで、現在でも方言として生きている言葉であるということを経験すると推察される。

## 3. 6 「ワタシ」と「ボク」

基本的に国語科教科書では女の子の自称詞は「わたし」が使用されるが、国語科教科書において男性による「わたし」の使用が初めてみられるのは『こくご二上 たんぼぼ』の「スーホの白い馬」であり、「スーホ」が自分より身分の高い「とのさま」に対して“スーホは売れない”と、凜と述べる場面である。他にも、「白いぼうし」の「松井さん」や「山ねこ、おことわり」の若い男性医師に化けた「山ねこ」等、大人の落ち着いた雰囲気を感じさせる登場人物が「わたし」という自称詞を使用していた。

また、筆者と語り手が同一人物であると考えられる説明的文章において、『国語三下 あおぞら』に掲載されている説明文「すがたをかえる大豆」から筆者が男性の場合でも、「わたし」が使用されている。

小学校、中学校の国語科教科書においては「わたし・私」(以下「ワタシ」)の出現率が最も高く、教科書本文だけでなく、単元名にも用いられている。単元名に自称詞が用いられているのは以下の11単元である。

小3下「わたしの三大ニュース」

小4下「わたしの研究レポート」「十年後のわたしへ」

小5「広がる、つながる、わたしたちの読書」「明日をつくるわたしたち」

小6「私と本」「ようこそ、私たちの町へ」「この絵、私はこう見る」

「今、私は、ぼくは」

中1「私が選んだこの一冊」

中2「未来の私にお薦めの本」

これらを見れば分かる通り、国語科教科書の単元名には基本的に「ワタシ」が用いられている。「ワタシ」は公的な場面で用いられるとされている。

つまり、「ワタシ」は性別や立場に関係なく用いることができ、極めて改まった場面以外で用いられる自称詞の中で、最も一般的なものであると言える。国語科教科書では、単元名の言語活動単元における地の文でも、一貫して「ワタシ」が用いられている。上記のような性質を利用したものと考えられる。

小学校段階では、男は「ぼく・僕」(以下、「ボク」)、女は「ワタシ」を使用している場面が多々みられるため、学習者である児童はそれが一般的で、そうでなくてはならないという意識を強く持つと推察される。しかし、中学校段階になると男性の「ワタシ」使用率が極めて高くなる。「ボク」と比べて「ワタシ」を用いる方が大人らしい印象を与えるということもあるだろう。

ところで、自称詞と同じような働きをするものに「敬称」があると考えられる。男には「～くん」、女には「～ちゃん」や「～さん」が用いられるのが一般的だとされてきたが、今日の教育現場では、性別に関わらず「～さん」を用いるのが望ましいとされる風潮がある。それにも関わらず、国語科教科書において、性別によって自称詞を指定するような構成になっているのはなぜなのだろうか。敬称を「～さん」に統一するのであれば、使用自称

詞も「ワタシ」で統一するのが望ましいのではないかと考える。

#### 4. 自称詞に着目した教材化研究

##### 4. 1 場面や相手に応じた言葉づかい

現行の国語科教科書では小学校3年生から言葉づかいに着目した指導が行われ、児童生徒が学習する順番としては

〈書く〉(相手) → 〈話す〉(場面) → 〈書く・話す〉(相手・場面)  
となっている。しかし、国語科教科書の教材本文に出現する順番は  
〈話す〉(場面) → 〈書く〉(場面) → 〈書く〉(相手) → 〈書く・話す〉  
(相手・場面)

である。また、話す・聞く・書く・読む等の言語活動の中で、児童がより早期の段階で行う言語活動は「話す・聞く」のはずである。ゆえに、小学校の低学年段階から、〈書く〉だけでなく〈話す〉時も場面によって使用する言葉が異なるということを学習する単元が必要である。敬体と常体、口語体ではどのようなイメージの差があるのかを考えさせたり、友達と地域の人ではどのような言葉づかいにするのがよいか考えさせたりするのが有効と考える。また、単元という形にしないまでも、教科書の中で児童が全体の前で発表する場面において、同ページに「みんなの前で発表する時には『です・ます』を使って話しましょう。」という趣旨の注意書きを添えるなどの配慮が必要となろう。

##### 4. 2 自称詞に着目した指導

自称詞の選択は自分の立場や印象形成に大きな影響を与える。しかしながら、小学校・中学校を通しても国語科教科書に自称詞に着目した単元や表記は、1つもない。幼児期から多様な自称詞を使用する子どもたちは、小学校・中学校と進むにつれ獲得する自称詞も増えていくことは明らかである。そのため、何も指導がなければ、場面や相手に対して一般的にはふさわしくないとされる自称詞を選択してしまうことがあっても不思議ではない。そのため、小学校低学年の時点では、みんなの前で発表するときや目上の人と話す場合、あるいは不特定多数の人が読む文章や手紙を書く場合には、「ぼく」「わたし」を用いることが一般的に望ましいとされるとい

うことを学ぶ単元が求められる。また、小学校中学年、高学年では、「ぼく」と「おれ」、「わたし」と「あたし」とではどのような印象の違いがあるか考えさせたり、公の場ではどのような自称詞を用いるのが望ましいか考えさせたりするような単元が必要なのではなかろうか。

#### 4. 3 内省する「少年の日の思い出」

内言と外言では用いられる自称詞が変わるという表現がみられるのが中学校教科書『国語1』に掲載されている「少年の日の思い出」である。この単元は一人称主観の文章であり、語り手の「私」は、客と会話する「僕」と同一人物であり、年齢も同じだと推察される。この文章では、一貫して語る場面は「私」、外言である会話の場面は「僕」という自称詞が用いられている。この違いは何なのだろうか。

「私」が語る地の文では、自分の置かれた状況を説明したり、話し手である自分が行った言動を説明したりしているところから、「私」が第三者的な視点から「僕」というキャラクターを持った存在を語っていると考えられる。このことから、「少年の日の思い出」は冒頭部より「自己の対象化」が主題化されていると考えられる。このような自己の対象化について、船津（1998）はH.ブルーマーの考えを取り上げ、「人間は自我を持つことによって自己を対象化するようになる」と述べている。また、自我について、G. H. ミードは「人間の自我には『主我』（I）と『客我』（Me）の2つの側面がある。」と述べ、前者は「自我の積極的側面を表わし、人間の独自性、創造性、主体性を示し、新しさを創発するもの」であり、後者は「他者の期待をそのまま受け入れたもの」であるとしている（船津、2004）。これを受け船津（2004）は、「主我」を人間の「創発的内省」(emergent reflexivity)を意味するものであるとした。「創発的内省」とは他者の目を通じて自分の内側を振り返ることによって、新たなものが創発されてくることを表す。

「少年の日の思い出」で考えると、「私」が「主我（I）」であり、「僕」が「客我（Me）」となるだろう。あまり重点的に扱われることがないと思われる前半部分で、「私」と「僕」による内的コミュニケーションが行われ、「僕」の言動を「私」が内省しているのである。

これらのことから、自称詞に焦点を当てて読む「少年の日の思い出」という単元は、自己の対象化を内包し、自己の言動を内省し向き合うことの

意味を伝えようとしている単元であると言える。自己の言動を省みるという点は、後に続く客が幼い頃にしてしまった過ちの告白へと接続する。また、「少年の日の思い出」は本文の中盤から始まる客の幼い頃の話に目が行きがちだが、前半の自称詞の変化に着目することで大人へと向かう中学1年生の子どもたちが自己を認知することの重要性に気づき、そこから自分自身と向き合うきっかけになり、自己実現へとつながるのではないかと考える。

#### 4. 4 自己を一般化する「走れメロス」

中学校教科書『国語2』に掲載されている「走れメロス」は、自称詞出現数が94例と、小学校・中学校を通した全文学的文章教材の中で最も多い。また、主人公のメロスは「私」「おまえの兄」「メロス」と3種類の自称詞を使い分けている。「走れメロス」での自称詞出現数94例のうち、メロスが話者であるのは79例であり、「私」が71例、「おまえの兄」が2例、「メロス」が6例である。このことから、メロスが日常的に用いている自称詞は「私」であることが推察される。

メロスが「おまえの兄」という自称詞を用いるのは自分の妹に対してであり、牧人と結婚した妹に向かって以下のように述べる。

1332 : 「…。おまえの兄のいちばん嫌いなものは、人を疑うことと、それから、うそをつくことだ。(中略) おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りをもっている。」

(下線筆者)

「おまえの兄」は役割語の一つであると考えられ、この自称詞を用いることで妹に対して「兄」という立場を意識させ、強調している。また、「おまえの兄」という自称詞を用いているときは、話している内容が妹に対してこれからの生き方を教示するようなものであることから同様のことが言えるだろう。「今宵呆然、歡喜に酔っているらしい花嫁」で「夢見心地」な妹に対して、「私」という自称詞では思いを伝えるにあたり力不足だったと考えられる。また、やがて刑に処される運命をもつメロスとして、彼が妹の「兄」として生きてきた証を刻もうとしたとも捉えることができる。

では、「メロス」という自称詞はどうだろうか。メロスが「メロス」という自称詞を用いるのは以下の場面である。

1335 : 「…。もう一つ、メロスの弟になったことを誇ってくれ。」

1343 : ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も打ち倒し、韋駄天、ここまで突破してきたメロスよ。」

(下線筆者)

1335 はメロスの妹と結婚した花婿に対して話す場面である。1343 は自分の身代わりになっている友達のセリヌンティウスを助けるために王のもとへ向かう道中、数々の苦難を乗り越えたが疲労困憊で立ち上がることができなくなってしまった自分自身に対して叱咤激励する場面である。緒方(2015)は、呼称として用いられる人名について、「他者と区別する属性として、一番明確である。」と述べている。つまり、「メロス」という自称詞を用いることによって、他の誰でもない「メロス」という人物であることを強調することができるのだ。また、「メロス」という自称詞には、“政治も分からず、笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた両親も女房もない村の牧人であるが、単純で邪悪に対しては人一倍に敏感で、約束を守り、人を疑うこととうそをつくことが嫌いな男”，加えて，“濁流を泳ぎ切り、山賊を打ち倒し、愛と誠の力を信じ、友との約束を果たそうと懸命に走る男”というラベル付けがされていると考えられる。固有名詞を自称詞として用いることで、「メロス」というたった3文字が、メロスの人格を表明する機能を持つようになる。幼児が自分の名前を自称詞として用いるのは、親しい人との関係を変容させないためであり、幼いときのままの自己を保ち続けようとしているのではないかという見解がある。それに対し、大人の場合は自身の名前を自称詞として用いることで「自己の一般化」がなされるのである。

以上より、自称詞という観点からみた「走れメロス」という単元は、固有名詞を自称詞として用いることで、自己を他者と明らかに区別する機能を持ち、社会的存在としての自己の特性を自覚的に表象することができるということを学習できる単元であると言える。

## 5. 研究の成果と課題

### 5. 1 研究の成果

小稿では、国語教科書悉皆調査によって、日本語の自称詞は他言語に

比べて種類が多く、基本的に目上（上位者）、目下（下位者）という対立概念を持っており、自称詞から見る日本人の自己規定は相対的・対象依存的であることを明らかにした。また、多様な自称詞を使い分けることは、自分自身を語る際に、聞き手との関係性や不安定な自分自身の位置・役割を決定することにつながり、対人関係において重要な役割を持っているということを指摘した。加えて、自称詞を選択することが、自己をどのように表現するかを選択する、自己のアイデンティティを選択することにつながるということを指摘した。さらに、スタイル・シフトや役割語の視点から、自称詞の持つ役割や機能を考察し、自称詞によって人柄が推察されることを明らかにした。

以上に加え、小稿では、自称詞に特化した学習指導の提案や、自称詞に着目した文学的文章の学習の可能性について検討し、「国語」という教科においてこれまであまり重視されてこなかった自称詞に着目し、自称詞の役割を学ぶことの意義や、自称詞に着目した読解指導の可能性を示した。自分の立場や印象形成に深く関わる自称詞を、様々な言語活動を学習する国語という教科で取り上げることによって、学習の幅が広がると考える。

## 5. 2 今後の課題

今後の課題として、以下の5点を挙げる。

- ①実際の教育現場における児童生徒の実態調査
- ②国語科教科書の構成と児童生徒の実態との関係性の分析
- ③性別不明の「ワタシ」に関するアンケート調査の実施
- ④自称詞とそれに付属する助詞、語尾の関係性についての分析
- ⑤翻訳文における原文との比較

### 【参考文献】

- 秋月高太郎（2012）「ウルトラマンの言語学」（『尚絅学院大学紀要』第63号，pp.17-30）
- 緒方隆文（2015）「呼称のカテゴリー分析：自称詞・対称詞・他称詞」（『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』，第10号，pp.1-13）
- 甲斐睦朗（1994）『実践国語研究別冊 新美南吉「ごんぎつね」教材研究と全授業記

録』豊田国語研究会

- 金水敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 黒崎佐仁子 (2010)「役割語から考える自称詞『わし』の方言性と出現時期」(『聖学院大学論叢』, 23(2), pp. 1-14)
- 小嶋玲子 (2017)「女子大学生の自称詞使用の変化—2001年と2011年の調査結果を比較して—」(『桜花学園大学保育学部研究紀要』, 第16号, pp. 65-77)
- 神戸和昭 (2012)「江戸東京語における自称オレの女性忌避」(千葉大学文学部紀要, pp. 52-64)
- 白石優子 (2012)「幼児期と青年期における自称詞使用の様相と自己の意識」(『修士論文要旨』, 人間科学研究, Vol. 25, p. 125)
- 鈴木孝夫 (1973)『ことばと文化』岩波書店 p. 146, pp. 129-203
- 高橋永行 (2018)「‘風の谷のナウシカ’にみる, 登場人物の話体—対人関係における言語行動—」(『生活文化研究報告』, 第45号, 山形県立米沢女子短期大学, pp. 8-20)
- 長田瑞恵 (2012)「自称詞の違いと印象形成—映像刺激を使用した検討—」(十文字学園女子大学, 『教心第54回総会』, p. 412)
- 新村出編 (2018)『広辞苑』第七版, 岩波書店
- 西川由紀子 (2002)「5歳児女児は自称詞をどのように使っているのか? 「うち」使用ブームに着目して」(『研究概要』, 華頂短期大学 47, pp. 88-101)
- 西川由紀子 (2003)「子どもの自称詞の使い分け「オレ」という自称詞に着目して」(『発達心理学研究』, 14(1), pp. 25-38)
- 西川由紀子 (2003)「クラス集団に規定された自称詞の使い分け—オレって言ったらヒゲがはえるんやで—」(『研究紀要』, 華頂短期大学, 48, pp. 155-167)
- 西田隆政 (2012)「『ボク少女』の言語表現—常用性のある「属性表現」と役割語の接点—」(『甲南女子大学研究紀要文学・文化編』第48号, pp. 13-22)
- 馬場俊臣・小松美愛 (2017)「役割語の知識の発達について: 小学生を対象としたアンケート調査の結果報告」(『北海道教育大学紀要』, 人文科学・社会科学編, 67(2), pp. 1-16)
- 船津衛 (1998)「自我のゆくえ」(『社会学評論』48巻4号, pp. 407-418)
- 船津衛 (2004)「社会的自我論の展開」(『パーソナリティ研究』, 日本パーソナリティ心理学会, 第13巻第1号, pp. 113-115)
- 光村図書(2014)『こくご一上 かざぐるま』『こくご一下 ともだち』『こくご二上 た



んぼぼ』『こくご二下 赤とんぼ』『国語三上 わかば』『国語三 あおぞら』  
『国語四上 かがやき』『国語四下 はばたき』『国語五 銀河』『国語六 創  
造』

光村図書（2015）『国語 1』『国語 2』『国語 3』

山西正子・山田繭子（2008）「『あたし』考」（『人文学研究』第4号，目白大学，pp.183-  
200）

れいのるず秋葉かつえ（2017）「歌舞伎自称詞の歴史社会言語学的研究—過去から現  
在を見る試み—」（『現代日本語研究会ことば』，38(0)，pp.124-143）

Wallon, H.（1983）『身体・自我・社会—子どものうけとる世界と子どもの働きかける  
世界—（浜田寿美男訳編）』ミネルヴァ書房

（わたなべ ゆきこ 池田町立池田小学校）